

機関番号：31302

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520429

研究課題名 (和文) 極小論に基づく音韻部門での表示と普遍原理の研究

研究課題名 (英文) A Study of Minimalist Phonological Representations and Universal Principles

研究代表者

那須川 訓也 (NASUKAWA KUNIYA)

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：80254811

研究成果の概要 (和文)：本研究では、統語部門を中心に発展してきた極小論を音韻部門にも適用することにより、言語機能の包括的な解明を試みた。同時に、統語論と音韻論の両領域において用いられている普遍的範疇および普遍的原理の解明をおこなった。

研究成果の概要 (英文)：This study attempted to explicate our understanding of the language faculty by applying to phonology the Minimalist Program employed in syntax. This involved exploring universal categories and principles which are employed both in syntax and phonology.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：極小論、音韻表示、普遍原理

1. 研究開始当初の背景

(1) 過去およそ60年にわたり、生成文法理論では、人間が生得的に有している言語機能の解明を試みてきたが、Chomsky (1995, 2001) の提唱する極小論 (ミニマリスト・プログラム) により革新的な展開を見せ、現在では心理学や哲学はもちろんのこと、進化論を含む生物学の諸領域に至るまで多大な影響を与えている。この新たな展開は、主に統語論を中心とした分野で示されてきたが、どういったわけか、音韻論だけは極小論の適用の射程外にあるように扱われてきた。

(2) この状況を踏まえ、研究代表者は、極小論の適用を統語部門に限定することなく、音韻部門にまで拡げて、分節内表示に限定した形で音韻モデルの構築とその検証を行ってきた。本研究では、研究代表者がこれまで提案してきた音韻素性の表示モデルを、さらに発展させ、超分節構造にまで適用することで、統語部門での現行モデルと理論的整合性を呈する音韻モデルを考案すると同時に、統語論と音韻論の両領域にわたり共通の普遍的範疇や普遍的原理の存在を解明する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、以下の三点を検討することで、統語論と音韻論の両領域にわたり共通の普遍的範疇や普遍的原理の存在を解明することを試みる。

(1) 音韻範疇（弁別素性や音節構成素等）を見直し、極小論の指針と合致する範疇を探求する。具体的には、独立解釈可能な弁別素性や最小構成性原理に基づいた韻律範疇の特定化を行い、音韻派生過程において余剰性を排する音韻体系を考案する。

(2) (1)で解明した範疇を基盤とした音節や韻脚といった超分節構造（プロソディ）と分節内階層構造を考案する。その際、統語論で用いられている裸句構造（Bare Phrase Structure）を用いた構造を採用することで、これまで異なる構造を呈すると考えられてきた音韻論と統語論との間に、構造上の整合性を見ることが可能となる。

(3) 極小論の立場から、音韻部門と調音・知覚システム（articulatory-perceptual systems）との関係を解明する。具体的には、音韻部門と調音・知覚システムとの間に、派生中間レベルを一切仮定しない直接的転写モデルを提案し、音韻現象の分析を通して、その妥当性を探る。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、統語部門を中心に発展してきた極小論を音韻部門にも適用することで、言語機能を包括的に解明しようとする。そのため、本研究では、生成文法理論による音韻能力の解明に力を注いできた研究者と、統語部門における極小論の最近の動向を熟知している研究者との密な連携が、研究遂行上必要である。前者の音韻研究の側面を研究代表者である那須川訓也が探り、後者の統語研究の探求を阿部潤が行う。阿部は極小論的観点から統語論の最適なモデルの開発を行っており、その分野の研究者として国内外において高い研究評価を得ている。そのため、これまで研究代表者が提案してきた音韻モデルを極小論の視点から発展させるのに必要な研究者であると言える。

(2) 本研究は、大別すると二種類に分けられ、ひとつは、研究代表者と研究分担者が個別に研究課題を具体的に設定し行われるもので、もうひとつは研究会や講演会を通じてそれぞれの課題についての研究成果を持ち寄り、情報や意見の交換を行うものである。前者については、下に示す分担者ごとの研究課題を

遂行するにあたり、最近の英語学関連の図書はもちろんのこと、極小論に関する最新の研究論文の収集を行い、それらの内容を丹念に検討する。後者の研究では、必要に応じて、同様の関心を持つ国内外の研究者から情報を収集し、意見の交換を行う。

4. 研究成果

(1) 極小論の観点から統語部門における句構造構築に必須となる基本要素を明らかにしたのち、そこで得られた知見をもとに、音韻範疇（弁別素性等）を見直し、極小論の指針と合致した範疇（エレメント）の探求をおこなった。研究成果は、日本音韻論学会が毎年発行している『音韻研究』の11号および12号に掲載された。その他、国内外の様々な学会で研究成果報告をおこなった。

(2) 統語部門における裸句構造を用いて超分節構造（プロソディ）の一部の構築に当たった。その研究成果の一部は、2007年10月にスウェーデンのゴッテンプルグで開催された International Conference on Bantu Languages、および2009年1月に米国ニューヨークで開催された CUNY Phonology Forum: Conference on the foot において報告された。

(3) 欠性対立を用いて表示上の余剰性を排するエレメントと呼ばれる素性を採用することで、音韻部門と調音・知覚システムとの間に、派生中間レベルを一切仮定しない直接的転写モデルを提案した。この研究成果の一部は、2009年9月に英国のエジンバラで開催された LAGB Meeting 2009、および2010年1月に米国ニューヨークで開催された CUNY Phonology Forum: The Word in Phonology において報告された。

(4) 今後は、極小論の最近の動向を踏まえ、進化的妥当性を明確に意識しながら、統語部門と音韻部門の両領域に共通する高次な普遍的範疇および普遍的原理の解明を、さらに行う必要があると考えられる。加えて、音韻獲得過程と生理学的獲得過程との境界を明確にし、それらの相互関係を探求した上で、音韻現象を説明できるモデルの構築が必要と言える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① Backley, Phillip and Kuniya Nasukawa

(2009). Representing labials and velars: a single 'dark' element. *Phonological Studies* 12, 3-10. 査読有.

② Nasukawa, Kuniya and Phillip Backley (2008). Affrication as a performance device. *Phonological Studies*, 35-46. 査読有.

[学会発表] (計 18 件)

① Nasukawa, Kuniya (9 September 2009). A disparity between lexical and non-lexical representations in Japanese. Linguistic Association of Great Britain (LAGB) Meeting 2009: The Fiftieth Anniversary Golden Jubilee Meeting, University of Edinburgh, Scotland, UK.

② Backley, Phillip and Kuniya Nasukawa (25 August 2009). Consonant-vowel unity in Element Theory. Phonology Forum 2009. Kobe University, Japan.

③ Nasukawa, Kuniya and Phillip Backley (15 January 2009). The foot: a unified entity for both metrical and segmental phenomena. CUNY Phonology Forum Conference 2009: The Foot, CUNY Graduate Center, New York, USA.

④ Nasukawa, Kuniya (11 September 2008). The phonological representation of syllabic nasals. Linguistic Association of Great Britain (LAGB) Meeting 2008, Essex University, Colchester, UK.

⑤ Backley, Phillip and Kuniya Nasukawa (27 August 2008). Representing labials and velars: a single 'dark' element. Phonology Forum 2008, Kanazawa.

⑥ Backley, Phillip and Kuniya Nasukawa (23 May 2008). Features as speech signal patterns. The 16th Manchester Phonology Meeting, University of Manchester, UK.

[図書] (計 2 件)

① Nasukawa, Kuniya and Phillip Backley (eds.) (2009). *Strength Relations in Phonology*. Mouton de Gruyter: Berlin and New York.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

那須川 訓也 (NASUKAWA KUNIYA)
東北学院大学・文学部・教授
研究者番号: 80254811

(2) 研究分担者

阿部 潤 (ABE JUN)
東北学院大学・文学部・教授
研究者番号: 40269444

(3) 連携研究者

なし